

V. 名古屋大学との連携による専門的な学び

第1章

名古屋大学との連携

山 田 孝

非教員養成課程である名古屋大学教育学部の附属高等学校である利点を十分に活かし、SSH研究開発を実施している。また、教育学部とは合同運営委員会を開催し、双方に関わる議事・議題を審議する機関がある。しかし一番の特徴は附属学校が名古屋大学キャンパス内に位置し、教育学部までの距離も徒歩10分でいくことができる。教育学部には、教育学系と心理学系があり、本校がSSHで実践している教育カリキュラム開発は教育学系と連携し、評価に関わる研究は心理学系と連携を行っている。教育学部を中心に名古屋大学全体とも連携を緊密に行っている。具体的には、名古屋大学の「教育学部附属学校協議会」でSSHに関わるプロジェクトの企画をする。中でも大学教員と宿泊をともしながら答えのない課題に取り組む「中津川プロジェクト」は連携企画の中心となるものである。

名古屋大学は平成27年度から大学総長が、それまでの濱口道成総長から松尾清一総長が就任した。濱口道成総長時代の「名古屋大学からNagoya Universityへ」というスローガンも「名古屋大学松尾イニシアティブ NUmIRAI 2020」に引き継がれた。それに伴い附属学校の役割も中期目標・中期計画では「国立大学の附属学校としての機能の点検と推進、大学の発展への活用」とより明確化された。また、事業計画としては「高大接続の推進、個別選抜方法の改革への取組」と「先進的な中等教育プログラムの推進、長期短期の留学生受け入れ数拡大による中等教育のグローバル化の推進」と具体化された。このような背景も本校のSSHにとっては高大連携を進める上での非常に大きな後押しとなっている。しかしながら、大学附属だからできるのではないかという声も耳にする。本校では名古屋大学との連携プログラムをもとに、高大接続名古屋大学モデルを策定し、その成果を地域を含む多くの高等学校に普及していくことを連携の目的にしている。

高大連携の具体的な取組として、多くの附属高校生が参加する「中津川プロジェクト」「基礎セミナー」をはじめ、「生物臨海実習」「附属農場実習」「学びの杜学術講座」等がある。

SSH 7年目になる今年度は、「中津川プロジェクト」に中学3年生も参加し、高校生に交じって大学教員との学びを行った。高校生のみ参加していたこれまでとは異

なり、中学生が議論に積極的に参加することにより高校生の活動が活発化した。また、中学生にとっても課題研究を本格的に行う高校での導入となった。中高一貫校での特徴の1つである。

「基礎セミナー」では、名古屋大学の初年次教育の場で大学生と席を並べ、大学生と同じ課題に対して、大学生と対等な立場でレポートを発表し、議論に参加することで高等教育に接続する学びを高校生が経験することができる貴重な取り組みである。今年度参加した高校3年生の中には定期考査も大学生に交じって受講し大学生以上の評価を受ける生徒もいた。大学生と一緒に合宿に参加する生徒もいる。現在、基礎セミナーを終了した生徒は「修了証」をもらうことができるが、今後は「終了証」だけではなくAdvance Placement名古屋大学に入学後の単位として認めてもらう制度の確立を目指した取り組みを行う。

名古屋大学大学院理学研究科附属臨海実験所での「生物臨海実習」や名古屋大学大学院生命農学研究科附属農場での講演会・見学会は、初等中等学校での座学を基本とした学習では「教科書の中の出来事」でしかない内容を、実社会とリンクさせて考えることのできる内容に変化させ、多くの実験観察を組み入れている。「生物臨海実習」では、実験所の大学教員の指導のもと磯採集をおして、磯に生きる生物を観察し生態系についての学びを深める。また、教科書の写真ではよく見る「生物の発生」を参加生徒たちは実際に受精させるところから顕微鏡で観察し、生体へと変化していく過程を一晚かけて観察する。50分の授業では決してできない体験的な内容である。この取り組みでは単に「生物の発生」の観察に留まるのではなく、生き物全般の「生命の神秘と生命の尊さ」について深く考えることができた。今年度は「さくらサイエンス」で招へいたモンゴルの高校生10名と引率教員1名も名古屋大学大学院理学研究科附属臨海実験所に引率した。モンゴルには海がないため、参加したモンゴルの高校生の多くは、海そのものや、海で生活する生き物の観察を通して日本の研究力の高さを経験することができた。「生物臨海実習」での疑問や関心を高等教育での学びにつなげている卒業生もいる。